



令和4年度

鹿児島県の教育

11月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校校長副部長

鹿児島高等特別支援学校校長
上 國 料 里 美

自立と社会参加に向けて

この三月に卒業したAさんが、久しぶりに学校に顔を見せてくれた。「仕事はどう？」と尋ねると「五月くらいまでしんどかった。職場に厳しい人がいてきつかったけれど、主任にそのことを相談したら、主任がその人に話をしてくれて、それからはいきなり言われることもなくなりました。上手いかないときには主任が声を掛けてくれるようになった。今は仕事が楽しい。」と笑顔で話してくれた。Aさんは、週五日スーパード勤めている。「他の従業員さんが休みたい日曜日は、自分なるべく出勤するようにしている。」と話している。会社の一員として、自分なりに考えている姿にうれしくなった。

鹿児島県内特別支援学校高等部卒業生の就職率は、平成二十七年以降三〇%前後を推移し、令和三年度は三十五%となった。高等部では「学校から社会へ」「子供から大人へ」と人生で最大ともいえる移行の前に、生徒自身が、自分の将来の生活をイメージできるような指導・支援が欠かせない。そのため、作業学習という各教科等を合わせた指導の形態を設けて様々な作業活動を通して働く意欲や態度を育成したり、長期間の産業現場等における実習の機会を積極的に取り入れたたりしている。

産業現場等における実習は、三年間をかけて段階的に進められる。一年生では、様々な職種を知ることで、本人の興味・関心を基に、期待感をもたせながら自分のよさや課題に気付かせることを大切にしている。二年生では、複数の事業所や職種での実習を通して経験の幅を広げ、自身の適性を知り、より具体的に進

路について学べるようにする。三年生では、これまでの実習で得られた情報を基に、生徒の希望や能力、適性を踏まえて、卒業後の就労生活を想定した実習を設定し、進路決定に結び付ける。

このような過程で、生徒や保護者とともに「振り返り」→「分析」→「課題設定」→「実習」を繰り返していくわけだが、生徒本人の希望や特性等と事業所のニーズがうまく合うよう方向付けていくことは容易ではない。何回も実習を重ねて、就職した先であっても、周りの人との関係がうまくいかない、仕事の変化についていけない、逆に仕事への慣れによる意欲の低下など、様々な理由で離職してしまう状況もある。

そこで必要になるのが、前述のAさんのように、自分の苦手なところを（もちろん得意なところも同時に）理解し、支援してほしいことを周りにタイムリに伝える力がある。つまり、A君の理解が図られているか、そして、自ら望む生き方に向かうための支援を自ら求めるコミュニケーション力を身に付けているかである。

そうした力を育てるために、好きなことを思い切りやり切る、苦手なことは小さな成功体験の積み重ねで乗り越える経験を積む、自分の思いや要望を周りの人に積極的に伝えるなどの取組が、幼児期から青年期までのそれぞれのステージにおいて積み重ねられていくことが重要である。自校の教育内容に、自己理解や他者に伝える力を育てる取組が体系的に準備されているか、検証していくことが必要である。

令和4(2022)年 11月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	14
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	12		



「鹿兒島県子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」

10年目のダイアログ

オフィスビューア 高崎 恵

鹿兒島県の学校で校長先生を務めてくださっている皆さんに届く冊子に、これまで出会った校長先生のお顔や、校長室での対話の数々を思い浮かべながら原稿を書いています！

今年、私がコーディネーターを務めている「鹿兒島県子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」十年の節目の年であり、私自身がこの仕事を始めてから二〇年になる年です。これまで、自治体、民間事業所、地域コミュニティ等でワークショップを実施してきましたが、二〇年間で最も多く出かけた場所は学校です。学校でワークショップを実施する際には、まずは、校長先生にご挨拶をして少しお話ししてから、担当の先生と打ち合わせをすることが多く、仕事を始めた頃の私にとって、その時間は結構なストレスでした。当時の私は、校長先生と、何をどう話しているのか、さっぱり分からなかったのです。

子ども時代、校長先生といえば、全校朝会で舞台の上から話す先生で、校庭で立ったまま聞いているうちに暑さや寒さで気は遠くなり、倒れて運ばれる子を見て「私も倒れたい！」と思ったりしましたし、校長室へ叱られる場所でしたから「校長室へ」と放送で呼ばれるたびに暗澹たる思いでため息をつき、聞かなかったふり

で行かずじまい、何かの賞をとったことを伝えるために呼ばれていたことを後に知ったこともありました。私にとって、学校の中で、できれば入りたくない場所が校長室とプールでした。

あれから四〇年・・・校長室でお話をしていると、開け放たれた扉の外で「校長先生、さようなら、また明日」「今日、これ作ったよ」「今日の給食は美味しかったね」「この間、漢字教えてくれてありがとう」等々。子どもたちが、校長先生に話しかけて通り過ぎていく姿に出会っています。校長室の前を通らないようにと遠回りしていた私の子どもの時代とは大違いのその景色が、私にはとてもまばゆく映ります。

二〇一三年にスタートした「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」は、昨年までの九年間で四一市町村延べ九八校、児童・生徒、教職員、保護者・地域の方々延べ一一、三九五一人にご参加いただきました。この十年、学校をめぐる状況は随分と変わりましたが男女共同参画の視点で見ると、男女別の名簿が混合になったことは、これまで男女共同参画の推進に携わって来た先輩方の悲願でもあり本当に嬉しいことでした。しかし、名簿を混合にただけでは不十分です。今でも、子どもたちとワークショップをしていると男女混合のグループの中で、

男子同士、女子同士で活動している姿をよく見受けま

す。学校のみならず社会における様々な活動が、それが不必要な場面においても男女別に行われ続け、男女という二分法的思考を定着させ固定的な性別役割分担を強化し続けてきた私たちの社会があります。

学校は、日々の活動を通して、私はどう思うか、どうしたいか、そして、どうするのかを自己決定するために自分との対話を重ねる場所です。性別のメガネをかけて眼差しを向け言葉をかけ続けることは、未だ開花していない子どもたちの可能性の芽を摘むことに繋がります。起きている時間のほとんどを過ごす学校の影響力は良きも悪きも大きいもので、学校教育には大きな期待がかかっています。これからも、「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」は続きます！学校を中核にした男女共同参画の学びの展開の充実に向けて今年度からの三年間は教職員対象の夏の研修も県男女共同参画センターで開催しています！子どもたち、先生方、保護者・地域の皆さんとの学びを重ねて、今は、校長室も私にとって大好きな場所のひとつです！皆さんに、お会いできる日を心から楽しみにしています。



学びについて

川上小(鹿) 牧 健 一

一 はじめに

令和三年一月二六日、中央教育審議会で「令和の日本型学校教育」の構築を目指した答申がまとめられました。令和四年になり、全国の小学校でこの実現に向けた教育活動が行われています。答申には次のようなことが書かれています。

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善。そのために個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実する。」

二 答申を考える

一昔前は、学習者が授業者から受動的に情報を伝達され、行動に変容が起ることを「学び」と捉えていました。いわゆる教授型(教え込み)の授業がそれにあたり、古来、学校教育の典型的なスタイルといわれていました。

ところが、グローバル化や少子高齢化、高度な情報化が進む社会では、人の脳に記憶された情報量を競うだけの学習は、次第に意味を失いつつあります。それよりも、様々な社会的変化に対応しながら自ら学ぶ力や、多様な人々と協働し、新しい価値観やイノベーションをもたらす力の方が、持続可能な社会を

創るためにも、より重要です。「主体的・対話的で深い学び」はその力を身に付けるための方策の一つといえるかもしれません。

学校段階では、具体的にどのような進めていけばいいのでしょうか。

川上小学校では、学校教育目標に「自ら学び共に生きる」を掲げています。日々の実践レベルでは、「めあて」と「まとめ」を意識した問題解決的な学習の授業、その学びを支える基盤的なツールとしてのICTの活用など、学校の全職員がそれぞれの立場で真摯に取り組んでいます。また、保護者による読み聞かせや地域の方々による食農指導など、校区内で、広義での協働的な学びの場は、本当に豊かに機能しているように思えます。学校を取り巻く大人が「子供のために」という思いを胸に、できることに根気強く取り組むことは教育の不易の部分です。そして、ほかにできることがないか、私たち教員は最新の知見に関する研鑽を深める必要があります。特に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」については考える必要があります。

答申によると「個別最適な学び」とは、「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した

概念だそうです。ある学習研究では、学びを

「学習者が理解活動や問題解決をする過程で自身の学習体験と比較・関連付けながら、知識を再構築すること」と捉えています。つまり、学びは元来、学習者主体で行われるものなのです。今回の答申は、それをより一層強調したように感じます。さらに、学習者にその過程を最適化する自己調整力を身に付けさせることが求められているように感じました。そして、そのようにして得た自分の考えを、社会的な活動の中で他者の考えと比較し、補完や統合を繰り返し、自分や集団の考えを広げたり、深めたりすることが「協働的な学び」ではないかと考えます。これは、前回の学習指導要領改訂の中でも述べられてきたことです。そのため、授業レベルで協働的な学びを実現するための方法は、これまでも研究されており、その学習形態として、協同学習、協調学習、その二つを組み合わせたジグソー法などが実践されてきています。

いずれにしても、知識を獲得する過程(自己の学習履歴の管理・参照、他者との情報の比較・関連付け、補完、統合)において、ICTは学びを拡張する重要なツールになると考えます。

三 おわりに

以上を実現する過程は、教員も同様です。まず、過去の文献や先行研究を振り返り、自分の考えをもつことが基本です。そして、他者との対話によって考えを深めることが大切です。



「地域とともにある学校」を目指す。

大丸小(隅) 秦 一成

一 はじめに

新任校長として半年過ぎた。コロナ禍の影響で学校行事実施の可否や学級閉鎖など、判断の連続であり校長職の重責を感じる毎日、考え事ばかりでは良くないと思い、樹木の剪定や除草作業、生け垣の整備などで体を動かす、気持ちを切り替えてきた。見通しが良くなってきた時ふと、地域の力があれば、効果的に行うことができるかと考えた。

本校は、朝の交通指導で保護者や交通協会の方々をはじめとした協力があり、児童の安全な登校を支えてもらっている。また、朝読書での読み聞かせには、地域の方々の協力をいただき、読書意欲や学習意欲の高まりにつながっている。

地域とともによりよい学校づくりを進めることが、校長として果たすべき役割の一つであると強く思うようになった。令和の日本型教育の構築に向けた方向性の中にも地域との連携が位置づけられており、これからの学校経営の重点とし、学校運営協議会のあり方を考えた。

二 学校運営協議会の組織化

(一) 運営協議部

学校経営方針や行事計画等について協議し、よりよい学校づくりを目指す。運営協議部の下に、環境整備支援部、生活安全支援部、学習支援部、体験活動支援部の四つ

の支援部を置き、PTA役員、民生委員、交通安全協会会員や公民館などと一緒「学校づくり」を進めていく。

(二) 環境整備支援部

校内の樹木剪定や除草作業などの環境整備について支援をいただく。本校には卒業記念樹がある。地域の方々が、当時の思い出を振り返りながら、剪定を行う同窓会のような取組を展開する。

(三) 生活安全支援部

交通安全協会や民生委員等の方々に、登下校中の安全指導や、休日の子供たちの様子の見守りをお願いする。その様子をもとに、児童一人一人の背景をつかみ、より深い児童理解をすすめる生徒指導や学習指導に生かす。

(四) 学習支援部

公民館の方々に、学習面についての支援をいただく。朝の読み聞かせ活動や長期休業中の学習支援をいただくことで、学習意欲の向上、基礎・基本の定着や問題演習の充実を図り、基礎学力の向上につなげる。

(五) 体験活動支援部

本校は、PTA役員が中心となって子ども会活動を行うことになっているため、地域の人材や教育資源を生かした体験活動についての支援を必要としている。横瀬海岸を舞台に、ウミガメ放流会やコアジサシ観

三 学校運営協議会の方針

学校運営協議会と協働し、地域の教育資源を生かした教育活動を展開する。

例えば地域に伝わる伝統芸能へ取り組んだり、観光資源を調べてまとめたりして、学習発表会などで地域の方々に披露することで、地域の良さを再認識してもらうとともに、子供たちの取組を話題にできるようにする。

地域の素材を生かした学習内容が校内の掲示物になったり、ホームページやブログ、回覧板などで紹介したりすることで地域への学校の話題を提供し、足を向けやすい環境を整える。

地域の特色を生かし、地域の方々と一体となれる様々な学習活動や学校行事、地域行事、子ども会活動を展開することで、子供たちのあふれる「笑顔」で地域の方々を元気にすることができらるだろう。

四 おわりに

SDGs十七の目標の四番目に、「質の高い教育をみんなに」とある。少子化により児童数が減少している中、学校を継続するためには、地域の方々とともに学校経営を進め、教職員が個別最適な学習のための取組につなげられるような体制づくりが不可欠であると考えられる。

以前の学校のように、地域と密接につながり、地域の人たちが学校に興味を持ち「なんかしようか?」とか、学校から地域の人たちに「○○をおねがいがいたいのですが」と、気軽に言えるようなしくみが再構築され、地域とともに「子供たちを中心」としてつながる学校経営を行うことで、地域を誇りに思い、巣立っていく子供たちを育てていきたい。



校訓「なかよくかしくくすこやかに」

の具現化を目指した学校経営 くきらり輝く中洲っ子の育成く

中洲小(市) 牛堀 隆 弘

一 はじめに

本校は、明治四年第九郷校の名称で開校以来、本年度で開校百五十一年を迎える歴史と伝統のある学校である。本校区は、かつて三方限さんぽうぎりがあり、西郷隆盛をはじめ、多くの偉人や傑士が生まれ育った地域であり、共研の杜にまつわる行事を今日も継承し、積極的に青少年の健全育成活動に取り組んでいる。近くに鹿児島中央駅が位置し、陸の玄関口という役割を担い、鹿児島市立病院の移転、中央駅再開発事業などに伴い、人や車の動きが活発になってきており、マンション建設による世帯数増加により児童数は微増傾向である。

二 学校経営の基本方針

校訓は、三方限の教え(負けるな・うそを言うな・弱い者をいじめぬ)を引き継ぎ、「なかす」の頭文字を使い「①なかよく ②かしくく ③こやかに」であり、児童及び保護者、地域住民は、校訓への愛着が深い。学校教育目標を「確かな学力をもち、心豊かでたくましい中洲の子を育成する」と掲げ、伝統的な校訓がもつ利点を最大限に生かした学校経営に努めている。

三 特色ある教育活動

(一) なかよく(心の教育の充実)

「笑顔で登校、笑顔で下校、きらり輝く中洲っ子」をキャッチフレーズとし、笑顔で楽しく過ごせる学校づくりに取り組んでいる。生活なやみ調べによるいじめの未然防止・早期発見、児童欠席時の家庭との連携などについて共通実践事項を定め、確実な実態把握と連携強化、情報共有を図っている。また、強力な学校応援団として同窓会があり、学林地(梅園)の管理を行っている。四年生は、梅園で収穫した梅を使い、梅シロップや梅干し作りに取り組んでいる。五年生は、バケツ稲作や学校内水田での黒米栽培など、貴重な体験活動を取り入れ、心の教育の充実に努めている。他にも地域の教育力を活用した野太刀のたぎ自顕流体験など、郷土の先人の生き方に触れるとともに心身を鍛える機会を設定している。

(二) かしくく(確かな学力の育成)

「授業で勝負」を合言葉に、個に応じた指導、支援の充実、定着(習熟)の場の確保、ICTの積極的な活用を重点事項とし、児童が「分かった・できた」と実感できる授業の展開を目指している。本年度は、研修サブテーマを「ICTの効果的な活用を通して」とし、一人一回の提供授業、その実践をまとめたICT活用事例集作成を計画している。

「すこやかに(体力の向上と健康・安全の充実)」

一校一運動を縄跳び運動とし、体力アップ！チャレンジがごしまに参加し、体力向上と仲間意識の高揚に努めている。児童会が中心となり、中洲ミニオリンピックを行うなど、様々な活動に郷中教育の理念の一つである異年齢集団による活動を取り入れたい。

(四) 地域とともにある学校づくり

本校区は、地域の子供は地域で育てるの気概のもと、地域全体で学校を支援する体制が構築されており、同窓会、地域と学校が一体となった活動を展開している。来年度の学校運営協議会設置を見据え、より一体となった新たな連携の在り方を探りたい。

四 おわりに

学校は、これからの地域を担う人材を育てる中核的な場所であり、地域社会の中で重要な役割を担っている。今後も地域と連携のもと、よき伝統の中にも新しい取組を創出しながら校訓を生かした学校づくりを進め、きらり輝く中洲っ子の育成に尽力したい。



ベクトルを揃える

坂元中(市) 川口 孝

一 はじめに

本校は鹿児島県北方三・五km、標高八十八mの玉里団地にあつて、校区は坂元小学校区及び坂元小学校区からなつてゐる。生徒数は四百三人、十三学級(うち特別支援学級二学級)で、生徒たちは、明るく素直、自らよく挨拶ができる。特に登下校時、校門において立ち止まり、学校に向かって深々と行う門礼は本校の伝統となつてゐる。

学校教育目標は「主体的に行動し、心豊かでたくましい生徒の育成」自分の考えを持ち学び合う活動をととして」である。この目標達成に向け教師と生徒が一体となつた教育活動を展開している。

二 学校経営の重点目標

全職員が連携し、学校・子供たちに良質な教育環境を提供することを基に、常に自分を鍛え、安全・安心で楽しく学ぶ場として、明朗闊達な校風を確立する。そこで、本年度は「確かな学力の育成」、「豊かな心の育成」、「健康やかな心身の育成」、「家庭と地域の連携」の四項目を重点目標に設定し、取組の充実を図つていくこととした。

三 取組の実際

(一) 確かな学力の育成

教師は始業と終業の時間をきつちりと守る。生徒は授業の五分前行動、三分前着席、

一分前黙想を行い、授業を迎える。指導においては「坂元中授業づくりの三ポイント」を踏まえた、主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくりを行つてゐる。特に本年は、終業時間を教師が守ることにより生徒の始業への取り掛かりが主体的に行われるようになり、授業の充実につながつてゐる。因みに、本校はノーチャイム行動である。

(二) 豊かな心の育成

課題として、生徒の自己肯定感の低さがあつた。生徒たちに自発的な活動を促す場を設定し、立場を与え、実践を繰り返す中で自己肯定感を高めていこうと考えた。そこで、本校の伝統行事と称する三大祭のうち、体育祭の充実から図つた。教務主任、保健体育主任を先進校で研修させ、生徒たちにより大きな立場を与え、主体性のある行事へと刷新を図つた。この他にも、集団宿泊学習の日程を二泊三日に伸ばすなどして、各学年において体験的学習の充実を図つてゐる。本年度一学期アンケート調査において、順調に自己肯定感の向上が確認されてゐる。

(三) 健康やかな心身の育成

「時を守り 場を清め 礼を正す」を合言葉に、基本的な生活習慣の定着を目指して

いる。ノーチャイムによる学校生活の順守と、特に四校時終了時刻の厳守及び給食準備七分以内完了の徹底。無言清掃及び五分前終了と見届けの徹底。良いあいさつ(微笑む、目を見る、伝わるボリュウムで声を出す)の励行を促す、などとポイントを絞つて取り組んでゐるところである。この他にも、道徳授業の充実を図るため学年ごとに全教師が全学級をローテーションで指導し、授業の充実を図つてゐる。

(四) 家庭と地域の連携

昨年度から「誰もが無理なく参加可能なPTA活動をめざして」を合言葉に、PTA活動の大幅な見直しを図つてゐる。主な内容は組織の改編と活動内容の簡素化である。特に慣例化してゐた活動内容の見直しにあつては多少の抵抗もあつたが、執行部等のねばり強い努力により新しい坂元中PTAが誕生し、教育活動にも以前にもまして積極的に協力をいただいているところである。

四 おわりに

今年の体育祭は台風の影響で延期した。開催日の早朝のグラウンドには多くの木々や葉っぱが散乱してゐた。すでに数名の職員がグラウンドの清掃を行つてゐた。しばらくすると、大半の職員と生徒百名以上が清掃に出てきて、八時前にはきれいさつぱり片付いてしまつた。誰が指示したわけでもなく、体育祭を成功させたいという同じ思いが、ごく自然なうねりとなつて起きた朝の出来事。この日は生徒主体の体育祭の成功と合わせ二重の感動を味わつた。素直で優しい生徒たちと、本校教育目標達成のために邁進する職員集団との出会いに感謝するとともに、教職員一丸となりベクトルを揃え、学校教育目標達成に向け、精進していきたい。



地域との協働による教育活動の実践

「ひとみかがやく島間」つ子の育成を目指して

島間小(熊) 南 健

一 はじめに

本校は、種子島の南部、南種子町の西海岸に面しており、校区内には、種子島南部の海上交通の要所である島間港を有している。島間港は、科学の最先端技術の象徴でもあるロケットが荷揚げされる港であるとともに、歴史的には、伊能忠敬が種子島測量を開始した地でもある。また、集落ごとの伝統芸能や昔ながらの伝統行事が現在も多く引き継がれており、古くから海外に雄飛した先達も多く、この進取の精神は現在でも色濃く残されている。本校は、今年で創立百四十八年目を迎え、南種子町が推進する宇宙留学生五名を含めた三十四名の児童が在籍している。学校と保護者、地域が一体となって、地域の特色を生かした日々の教育活動に取り組んでいる。

二 取組の実践

本校では、学校・家庭・地域が密に連携し、社会に開かれた教育課程の実現に向け、地域の素材や人材、伝統文化を生かした学習活動に取り組み、地域を愛し、心豊かでたくましい子供の育成に努めている。

(一) 「カライモ」の栽培体験活動

種子島は、カライモ栽培発祥の地と言われ、現在でも多くのカライモが生産されている。本校では、校区内でデンプン工場を営む地域の方をゲストティーチャーとして招き、校内の菜園に「安納芋」を植え付け、栽培する体験学習を行っている。かつて、種子島の人々を飢饉から救い、現在でも種子島の基幹作物の一つとして、種子島の農業を支えているカライモの栽培を通して、郷土の歴史や産業、人々の暮らし、食文化への理解を深める学習として、地元の素材と人材を活用した郷土学習を実践している。

(二) 伝統芸能の継承活動

校区内の各集落に、「十二提灯」、「ヤートセー」、「相撲取り節」といった伝統芸能が伝承されており、神社への奉納の舞いとして綿々と受け継がれている。児童数の減少に伴って、各集落での伝承活動は難しい状況にある。そこで、本校においては、各集落の保存会と連携し、総合的な学習の一貫として、伝統芸能の継承活動に取り組ん

でいる。各集落の踊りを三年単位で子供たちは練習し、毎年、地域と合同で実施する運動会において練習の成果を披露する。三年間は同じ舞いを練習するため、三年目ともなれば子供たちの舞いの動きや太鼓の叩き方、かけ声の出し方など板に付いてくる。地域の良き伝統文化を後世に引き継ぎ、「島間」が子供たちにとっての心のふるさとになるよう地域の方々も積極的に指導してくださっている。

(三) 地域と連携した安全教育の推進

本校は、交通安全無事故記録七六七一日を達成し(十月一日現在)、現在も記録を更新し続けている。この記録の背景には、普段からの地域の方々の見守りと、地域と連携した安全教育の推進による子供たち自身の「命を守る」ことへの意識の向上がある。今後、学校及び地域の防災力強化の推進を図るため、地域と学校が連携した防災・安全教育を推進していく。

三 おわりに

これからの社会を担っていく子供たちが、絶え間なく変化していく社会や世界と向き合い、自らの人生を切り拓いていくためには、学校と地域が教育の目指すところをしつかりと共有し、地域の教育資源を有効に活用しながら教育活動を展開していくことが求められている。今後も、学校・家庭・地域の連携を密にし、相互の信頼と協働のもと、「ひとみかがやく島間」つ子を育む教育活動の推進に努めていきたい。



校訓「至誠」を胸に、

未来に挑む子供の育成

与論小(大) 岩元輝美

一 はじめに

本校は、鹿児島市から約六〇〇km、沖縄まで二三kmの鹿児島県最南端「癒やし島の島」と言われる与論島の東南部に位置し、校区内には、星の砂で有名な百合ヶ浜をはじめとする白い砂浜と透明度の高い海がある風光明媚で人情味あふれる地域にある。至誠【真心をもって人に尽くす・真心をもって事にあたる】を校訓に、創立一四七年を迎え、現在児童数は一〇四人、教職員十七人の伝統ある学校である。

また本校は、他の町内三校(那間小・茶花小・与論中)とともに、本年度から教育課程特例校として、海洋教育科「ゆんぬ学」を通して、地域と連携した協働的な探求活動にも取り組んでいる。今回は、その取組の一端を紹介する。

二 与論小の海洋教育科「ゆんぬ学」

与論小では、与論のよさを実感させるために、与論の「ヒト・モノ・コト」について体験活動や探求活動を幅広く行っている。

(一) ユンヌの海と私たち
NPO法人海の再生ネットワークよろんの協力のもと、グラスボートからのサンゴ観察を行ったり、海の不思議や海の生き物

の生態について調べたりする。そして、

サンゴの存在が海の環境を維持していく上で欠かせない物であることを理解し、サンゴの環境を守るために自分たちでできることを考えた。与論漁業協同組合の協力によりサンゴの養殖体験活動を行ったり、海岸清掃活動を行ったりしている。

また学校行事として、四年生以上の児童が百合ヶ浜付近の海2kmに挑む遠泳大会も第四一回を数えている。美しい与論の海での遠泳大会は一生の思い出となり、大きな自信につながっている。

(二) ユンヌの言葉と私たち
伝統的な与論の方言である「ユンヌフトゥバ」を全学年で年間を通して取り扱って



遠泳大会



サンゴ養殖体験活動

三 おわりに

いる点が本校のカリキュラムの特徴の一つである。与論民俗村の菊さんをはじめとする外部指導者の協力を得ながら、低学年は日常生活での身近な単語を中心に、中学年は四つの基本文型を中心に、高学年ではユンヌフトゥバ劇を中心として学習している。毎時間の学習の最初には、PTAが作成した「ゆんぬふとうばカルタ」と町教委が作成した「ゆんぬふとうばことわざカルンダー」の朗読も行っている。

(三) ユンヌの郷土芸能伝承と私たち
国指定重要無形文化財である「与論の十五夜踊り」の継承活動や、エイサーなどの郷土芸能活動にも積極的に取り組んでおり、運動会等で披露している。



与論の十五夜踊り

以上のような学習活動は、与論の魅力を豊かな感受性をもって捉える力(「海と人に親しむ」や、与論の文化と与論に暮らす人々とを関連付ける力(「海と人をつなげる」)となっている。そして、それらの過程で子供たちの輝く姿を目にすることができる。

今後も、子供たちに海や海に守られた伝統文化を愛する心や保全の態度を育んでいくと共に、自らの問いを他者と協働しながら主体的に探求していく態度を身に付けていってほしいと思う。そのことが、学校教育目標「校訓『至誠』を胸に、未来に挑む子供の育成」の具現化された姿となるのだから。



失敗は自分のせい

郡山小(市) 山本省吾

教職人生も三十年を超えた。いろいろな人との出会い、いろいろな書物との出会い、教師としてだけでなく、一人の人間としてたくさんの方を学ばせてもらった。

二校目の学校での話である。年齢は二十代後半で、授業もそれなりに形になり始め、研究会などにも積極的に参加し、自分自身の指導技術に多少なりとも自信が芽生えはじめたころである。ある年、校内研修で授業提供をすることとなり、事前に最新の指導法について情報を集め、

それを自分なりにアレンジして授業に臨んだ。ところが予想に反して、子供たちの反応は鈍く、終末の振り返りでは定着もいま一つで、授業としては惨憺^{さんたん}たる結果となった。

授業後の授業研究会では自身の反省や質疑等が行われたが、その中で「子供たちが緊張していて：」「子供たちが新しいスタイルについていけないくて：」「子供たちが」と、授業の失敗を子供たちのせいにする自分がいた。

その夜の授業の打ち上げ会で、ある年配の先生が話にきてくださり、次のようなことを言われたのを今でも覚えている。「先生、今日の授業は斬新でおもしろかった。でも、うまくいかなかったことを子供のせいにするのはどうだろう。」私は、その言葉にハッとされた。

最近読んだ書物に幸田露伴の言葉が掲載されているものがあつた。それは「失敗をしたら必ず自分のせいにせよ」という言葉である。物事がうまくいかなかったとき、人のせいにすれば楽である。苦しみもあまりない。ところが、自分に責任があると思うと、辛く苦しい思いをすることとなる。しかし、この苦しみから自分

身を振り返ることができ、反省が生まれそれが成長、前進へとつながっていく、結果として問題の解決へ導いてくれる。若いころの私にはその感覚が全くなかったように思う。

今は、管理職として学校運営にあたっているが、日々の教育活動では、うまくいっていることよりうまくいかないことの方が多い。そんな時、職員のせい、子供のせい、保護者のせいではなく、私自身に足りないことはなかったか自問自答する毎日である。「失敗は自分のせい」これを学校で起こる様々な課題解決のスタートにしていきたい。



だいかがやらんとなあ

川辺小(南) 岩戸 淳

これは、私が管理職任用標準試験を受験する少し前の頃の話である。

その教頭先生は毎朝、私が出勤する時間に、きまつて右手に火ばさみを、左手にバケツを持たれ、校庭及び外周を隅々までくまなく歩いて回っておられた。雨の日も、風の日も、雪の日もそれを休まずに続けておられた。ひととおり回ると、正門周りや校舎正面玄関周りを掃き、登校する児童や出勤する職員一人一人に声をかけておられた。私は、そのお姿に感服する一方で、朝の電話対応が私の役割になっていることに対し、いささかの疑問を感じていた。

ある日、そのことを率直に教頭先生へお尋ねしてみた。すると、うっすらと笑みを浮かべ、一言、告げられた。

「先生。だいかがやらんとなあ。」

げげんな面持ちの自分に対し、教頭先生は、後ろ姿で論そうと考えておられるようだった。

思い起こすと、前日拾ったところに新たなごみが捨てられているのを見て、大変がっかりされていた。「子供に、感じる心を育てねば。」と声を荒げられていた。朝の電話対応を私に任せられると思うからこそ、教頭先生は安心して外に出られるのか。始業前の学校への電話は、ほとんどが保護者からの欠席・遅刻等の連絡だ。そこに教頭が縛られたら……。

当時、私は初めて担任外の加配業務を担い、自ずと教頭先生と話をする機会が増えていた。そうか。毎日、朝から晩までずっと児童から、同僚から、保護者から、地域住民や関係機関から教頭先生と声をかけられ、その一つ一つに細やかに対応され、絶大な信頼を得られている。だからこそ、朝のひととき、学校の息吹を感じて、学校の要として動いておられるのだ。

今、自分のしていることや考えていることが果たして子供や職員一人一人の幸せにつながるのか、悩むことの多い日々。ちよつと努力するどできそうなのがなかなかうまくいかない。そんなとき、この一言を思い返している。

「風の人 土の人」について

改めて考える

大川内小(北) 遠 竹 伸 一

まちづくりを語る上で欠かせない言葉の一つに「風の人 土の人」という言葉がある。元信州大学名誉教授、農学者の玉井袈裟男氏が立ち上げた「風土舎の設立宣言」に記されている。要約すると、「風土」という言葉から、風は動き遠くから理想を運び、土はそこにあつて命を生み出し育むものと捉えている。人にも風の性と土の性があり、理想を求める風性の人、現実を根をはる土性の人が集まって、まちという文化が創り上げられると記されている。

これは、常に自分の学校経営の中心に据えている言葉である。本校は、十年ほど前、児童数十名程に減少し、学校存続の危機に瀕している状態であった。そこで、出水市の特認校制度を活用し、市、地域、学校が一体となって「児童増対策」に取り組んだ経緯がある。特に地域の学校存続への思いは強く、魅力ある学校づくり

のために、夏は川でカヌー、冬は椎茸栽培や炭作りなど、大川内の舞台を生かした体験活動の準備・運営に深く関わってくださっている。

教職員は、新しい力で校風を刷新し、地域に貢献し、地域を愛する子どもを育てる風の役割があり、地域は、ふるさとを守り、歴史や伝統、ふるさとの未来を考える土の役割がある。両者が、手を携え、膝をつき合わせて語り合って、現在の大川内小が成り立っている。これは、子どもたちも同様であり、地元の子ども、特認の子ども、それぞれが自分のよさや可能性を発揮することで、切磋琢磨し、経験を積み重ね知恵や知識を身に付け、生きる力を育んでいる。本年度も新たな風が入り、現在五十六名に増えた子どもたちが元気に学校生活を送っている。

さて、校長として赴任して二年目、本年度の新しい風を吹き込んでいる真つ最中である。職員と共にその成果を検証し、本当に子どもたちのためになっていくか厳しく見定めていくつもりである。それと同時に、来年度の風について構想を練り準備を始める、気持ちが高ぶる時期でもある。

「俺たちは、

お前のロボットじゃない」

田検中(大) 大脇 和久

「いつも、自分の思いどおりに、俺たちに命令しやがって。俺たちは、お前のロボットじゃない。」K中学校に勤務している時に、U男が泣きながら私に飛びかかってきた時の言葉である。

U男は、成績も良く、どちらかと言うとおとなしく、真面目な生徒であった。私はその当時三十代後半で、学年の生徒指導を担当していた。やる気に燃え、問題行動のある学年の生徒に対しては、厳しく指導していた。しかし、自分の学級の学級経営に関しては、どちらかと言うと優しく、生徒に接していたつもりであった。

文化祭の展示物を作成していたが、何人かの男子生徒が遊び半分にやっていたことを指導した時の出来事である。その中にU男が入っているとは思わず、また、U男がそのような言葉を発して泣きながら飛びかかってくるとも思っておらず、非常にショックな出来事であった。そ

の理由を詳しく聞いてみると、「U男はあまり悪いことをしないので指導されることは少なかったが、他の生徒たちが何か悪さをすると、理由も聞かず高圧的に指導するのを何度も見ていて耐えられなかった。」とのことであった。U男の正義感からの言葉であった。

その後しばらく、自分の指導法を深く考えさせられた。生徒指導担当ということで、理由も聞かず、一緒くたに、高圧的に指導していたのではないか。生徒一人一人の性格や個性を考えて指導していたか。その生徒の改善・成長を第一に考えて指導していたか。いろいろと自問自答していると、自分が非常に小さな人間で、恥ずかしくなったのを、昨日のこのように覚えている。そして、U男の言葉で、自分の傲慢で、身勝手で、高圧的な指導を意識して改善しようと努めたことを懐かしく思い出す。

先日、U男に学級の同窓会で久しぶりに会ったが、そのことを謝り当時の私を大きく成長させてくれた出来事だったと話した。U男もすっかりと覚えていて、「生意気なことを言ってますみませんでした。」と笑いながら答えてくれた。

ある日の校長講話



「一生懸命な姿に感動」

樋脇小(北) 谷 山 弘 毅

先日の運動会、みなさんよく頑張りましたね。みなさんの頑張る姿に校長先生も感動しました。みなさんは、二学期が始まってすぐ、毎日暑期中、運動会を成功させるためにたくさん練習を頑張ってきました。みなさんが汗をいっぱいかき、一生懸命頑張る姿をみるといつも感動します。この感動は、みなさんの一生懸命な姿からしか生まれません。運動会では紅白で勝敗を競います。スポーツの大会には、必ず勝者(勝つ人)と敗者(負ける人)が出てきます。

勝つことを目指して頑張ることは大切なことです。負けたくやしさに涙が出るくらい気持ちを決めて全力を出してほしいと思います。その一生懸命頑張るみなさんの姿に感動が生まれるのです。「頑張ることは素晴らしいことだ。」「負けても頑張る姿はカッコいい。」そんな気持ちをもってこれからもいろいろな活動に取り組んでほしいと思います。

さて、みなさんの中に「運動会が苦手だ。」という子はいませんか？走るのが苦手って子、いますよね。運動会なんてなければいいのに。」「」と思っている子。実は校長先生も運動会が苦手でした。運動会のかげっこではいつもボリ。「運動会なんてなければいいのに。」「」と思っていました。運動会ではいつも悔しい思いをしていました。そこで、運動会の次の日から一年間、近くの川のほとりを毎朝走りました。小学校五年生のころのことです。一年間走った結果、六年生になるころには、走るのがとても得意になっていました。走ることに自信をもてるようになりました。この運動会で悔しい思いをした子は、今日から練習してごらん。必ず足は速くなります。一年間ですよ。一年間は続けて練習することが大切です。「継続は力なり」という言葉があります。どんな苦手なことでも続ける

と必ず力が付きます。これからも一生懸命頑張りを続けるみなさんの姿に期待しています。

今できることひたむきに

感動を呼ぶ高校球児の姿

月野小(隅) 野 元 忠 久

この夏は、全国的にコロナウイルスの感染が爆発的に流行し、鹿児島県も四千人を超える感染者の数や、連日死者数の報告もありました。そのような夏に勇氣や気持ち、考え方を教えてくれたのが、夏の甲子園大会です。どの高校にもドラマがあります。今年の大会の決勝は、創部当時、五人しか部員がいなかった下関国際高等学校と、片や仙台では甲子園常連校で、三回の決勝進出がありながら優勝がなく、東北勢にとっても初優勝となる、仙台育英学園高等学校の、どちらも初優勝校同士の対戦でした。結果は、八対一と仙台育英学園高等学校が勝利しました。その時の監督の優勝のコメントで「青春って、すごく密なので。でもそういうことは全部ダメだ、ダメだと言われて。活動してても、

どこかでストップがかかって、(中略)止まってしまふような苦しい中で。でも本当にあきらめないでやってくれたこと、でもそれをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて、全国の高校生のみんなが本当にやってくれて。」の全国の高校生への感謝の気持ちに心惹かれました。

今の小学三年生から下の児童は、マスク着用が当たり前前の学校生活を過ごしています。小学生も密になるのが当然の生活ですが、今はそれも禁止しています。だからこそ個人が取り組むことを優先させます。協力することの大切さと言いながら、なかなか実践に結び付けることができない現状です。それでも、できることをひたむきに取り組む姿が大切です。高校球児は、レギュラーの頑張りはもちろんですが、それ以外の部員が、自分の置かれた仕事、相手チームを偵察したり、練習に遅くまで付き合ったりしてレギュラーを支えます。そこには、仲間の為という心のつながりがあります。今できることに限りはありますが、密を避ける中で、心のつながりを深めて、自分のできることをひたむきに取り組む姿は、きっと人々を感動させると思っています。

持久走大会での講話

「きついことでも楽しもう」

佐々木小(始伊) 瀬戸山 文 隆

寒い中でしたが、参加した皆さんが、日頃の練習の成果を発揮し、最後まで走り切ったことをとても嬉しく思います。このように、全力で何かに取り組む、やり遂げた皆さんの姿を見てみると、本当に感動します。

ところで、「持久走大会って、なくてもいいのに」と思っている人はいませんか。実は、校長先生も、小学生の頃、「どうしてこんな寒い中、長い距離を走らないといけないんだろう。嫌だなあ。」と思いつながら、走っていました。

なぜ、持久走大会があるのか。その目的の一つが、「きついことに負けない強い心と体を鍛える」ということです。寒さや息苦しき、体力消耗、そういった壁を乗り越えることが心や体の成長につながるのです。

それでは、その壁を乗り越えるためには、どうすればいいのか。皆さんも、きつと自分なりの目標を立て、計画的に練習に励んできたことでしょう。また、負けたくないライバルや励まし合った友達の存在も、壁を乗り越えられるパ

ワーにつながったのではないのでしょうか。

そして、きつい壁を乗り越えたら、今味わっているような、目標を達成した充実感や完走した爽快感といったものが待っています。うまく走れなかった人も、「次は、こうしよう。頑張ろう。」と思っているに違いありません。

実は、校長先生も、中学・高校と陸上部に所属していました。大した記録は残せなかったのですが、仲間と一緒に汗だくになりながら、励まし合って走り、少しでも自己記録が更新できた嬉しさを味わったことで、走ることが楽しくなっていたんです。

今日は、長い距離を走るという壁を乗り越えることができた皆さんですが、これらのことは、勉強でも習い事でも、他のことでも言えることです。何事にも「楽しむ」ぐらいの気持ちで取り組んでほしいと思います。



話のひろば



転がる石には

苔が生えぬ

大和小(大)

新村 篤

ノホシ海岸」がある。

ホノホシ海岸は、訪れた人を一瞬立ち止まらせる光景が広がり、自然の雄大さと幻想を体感できる場所である。この浜辺は砂浜ではなく、全て丸みを帯びた石が、埋め尽くされている。これは太平洋の外海に面しているために、絶えず打ち寄せる荒波により、石の角が削られたのである。波打ち際に行くとも太鼓のような独特の「カラコロコロ」と不思議な音が響き渡っている。この音とは、石の摩擦によるものである。石の表面をよく見てみると摩擦により、つるつ

奄美大島南端の瀬

戸内町古仁屋から車

で三十分程の景勝地

に私のお気に入りの

パワースポット「ホ

るしていて、苔など一切生えていない。

「転がる石には苔が生えぬ」ということわざには、「よく動き、働く人が生き生きしている」、「活動的にいつも動き回っている人は能力を錆びつかせない」、「常に努力している人は、生き生きとして見える」などのたとえがある。

私たちは、常に「転がる石」でありたいと思う。「転がる」とは、活発に動くことであり、「動くこと」とは、子供たちのために汗を流し行動を起こすことであり、自ら率先垂範し働く姿こそ、子供の笑顔は光り輝くものとなる。

昨今、子供の学ぶ意欲や学力・体力の変化、家庭・地域の教育力など、教育を取り巻く環境は大きく変化している。それに伴い学校が向き合うべき課題も多様化しており、個人の力量だけでは解決が困難になっている。これらの課題に対応するためにも、『組織力を高める』ことが求められている。そのために、自律的に学び続ける力やチームとして組織的に課題解決できる力などを養わなければならない。更には、協働体制の構築を図り、チームとしての学校を創り上げていくことが重要であると思う。

我々教師が、お互いを磨き合えば、学校全体はもろろん、個々の力量も発揮するはずだ。そ

れにより学校は躍動し、子供たちもより一層輝

くと信じている。世界自然遺産の島にある学校として誇りをもち、転がる石のように動き、活気に満ち溢れた学校経営に邁進していきたい。

心の中の原風景

桜峰小(市)

大迫 誠

鹿児島で暮らしたことのある方に「桜島の姿は？」と尋ねるとどんな姿がよぎるであろう。

一般的には、鹿児島市街地から見た南北に長くどっしりとした姿かもしれない。一方、桜島は鹿児島のシンボルではあるが、離島を除いた両半島でも、見ることができるところは限られている。私自身もこの姿を臨むことができたのはこれまで勤務した九校中三校だけである。その三校は桜島を背に錦江湾を横断遠泳した学校、大隅半島の高台から見える学校、そして眼前に迫る本校であり、全てまったく違う姿がある。どの形が一番好きか、と言われても順番を付けるものではない。ただ、私にとっては幼少期から高校時代を過ごした故郷から見ていた桜島が

懐かしく思える。

桜島の北東に「新島」という島がある。かつては二百人以上そこで暮らしていたというが、過疎化が進み、いつしか無人島になった。そこに三年ほど前に御夫婦が移住し、現在は二人だけで民泊を営んでいる。新島には本校の分校もあつたということで、先月、一〇四年生の校外学習で訪れた。島のガイドをしていただいている中で、「私はここから見る桜島が大好きで、不便かもしれませんが、ここで暮らすと決めました。」と話された。島の高台には雄大な桜島へ漕ぎ出すかのようなブランコも設置されていた。きつと生き生きと語る心の中にこの原風景が在り続けるのであろうと感じた。いつまでもここで過ごしたい、この島を守っていききたいという言葉には力がこもっていた。

原風景はこのような象徴的な見えるものだけではなく、失われた味であつたり、掛けてもらった言葉であつたりするのかもしれない。

桜島地域は令和七年度末に全て閉校になり、新たに小中一貫の義務教育学校が開校する予定である。これからの三年余り、子供たちの健やかな成長を見守り、ここで過ごす心の中の原風景を大切にさせていきたい。

資源を生かして

五月中旬、友人と

古仁屋高

米澤 瑞代

ともに瀬戸内町の観光案内にある「西古見観測所跡」に向かった。中心地から車で

で走ること約一時間半、到着して言葉を失った。「掩蓋式第二観測所跡」とあつた。「観測所」の文字を見た時点で気象庁の観測所だと思い込んでしまったが、観光案内をよく見ると「旧陸軍観測所跡」であつた。

「夕陽が美しい」と謳っており、東シナ海に沈む夕陽を見るために観光気分でのんきに向かったが、日没を待たずに帰路についた。この観測所から景色を楽しむためでなく、いつ現れるとも分からない敵艦を監視していた方々の気持ちや思いを、のんびり夕陽を堪能する気持ちにはならなかったからである。戦争遺跡の役割について述べられた「自ら語らずとも存在において語る」という言葉を思い出した。

本校は「奄美大島要塞司令部」跡に建てられており、加計呂麻島を含む瀬戸内町内には戦争遺跡が五二遺跡（二〇六施設）あり、そのうち特に重要な六遺跡については国史跡指定を目指しているという。先の「観測所」からは南東か

ら北西方向まで一八〇度見渡すことができ、砲撃のため「標的をきちんと捕らえる目」として重要であつたと記録されている。一九四四年以降は瀬戸内町も空襲を受けており、空襲に怯える恐怖の日々や戦後の苦難の生活などについての体験記も残る。明るく素直な子どもたちの笑顔や美しい大島海峡を見ながら、大島海峡一帯が再び軍事的に要衝の地として意味を持つ日が来ないことを切に願うばかりである。また、来年は奄美大島の日本復帰七〇周年でもあり、今の混沌とする世界情勢を鑑みると、戦跡等の「語り」を活用して学びを深める必要性を強く感じている。

二〇二一年に生物多様性保全上最も重要な地域としての価値が評価され、世界自然遺産に認められた奄美大島へ赴任して半年経つが、人や自然、文化に触れる度にその魅力、奥深さなど正に価値を実感する日々である。いわゆる予測困難な時代にあつても、生命力豊かな奄美大島の植物のように、力強くかつしなやかに生き抜く力を育むために、恵まれた資源を大いに生かして、いかに教育活動の充実を図っていくかが目下の課題でもあり、楽しみでもある。

読書案内



■川崎宗則 著

「あきらめる」から前に進める

南小(隅) 堀 川 博 治

本書は、「ムネリン」の愛称で現在もプロ野球独立リーグの栃木ゴールデンブレーブスで活躍する鹿児島が生んだヒーロー川崎宗則選手の自叙伝である。私自身もホークスファンで、ヒーローインタビューで川崎選手が最後に叫ぶ「チエスト！」に元気をもらった一人である。重富小三年から野球を始め、メジャーリーグでも活躍した。走攻守の三拍子が揃い、二〇一五年のWBCでは、侍ジャパンの世界一に大きく貢献した。人一倍の元気でチームを鼓舞し、ム

ードメーカーとして欠かせない存在の選手である。

昨年六月、川崎選手が当時私の勤務していた母校である重富小を訪問され、気さくな人柄、小学校当時の思い出を楽しそうに語る姿に大変惹きつけられた。今年になって、書店で偶然に出版直後の著書が目にとまったのである。

川崎選手の野球選手としての土台は、中学校時代にある。当時、部活顧問が野球経験者でなかったため、練習メニューやメンバー選び、サインまで全部自分たちで決めるしかない環境が自分たちで考える力を最大限に高め、成功体験を味わうことで心底野球が好きになったのである。イレギュラーな経験の積み重ねが、現在の自分に辿り着く大きな要因であると述べている。

また、二〇一八年に自律神経の病気を発症し現在も病気と向き合い、環境の厳しい独立リーグに身を置くことに人生の中で一番幸せを感じていることに大きな感銘を受けた。その他、職業論やコーチング論、教育論なども書かれており、著者の物事に対する柔軟な思考や視野の広さ、懐の深さを感じ取ることができた。

本書を通して、病気を治すのではなく受け入れようとする著者に共感し、より身近な存在と

なった。また、学校教育において、児童生徒が能動的に考える場の設定がいかに大切か、さらに、将来を見通したキャリア教育やコミュニケーション能力育成の重要性にも気づくことができた。これからも著者のますますの活躍を期待するとともに、自分自身も校長として更なる進化を遂げていきたいと思う。

KADOKAWA 一六〇〇円

■稲盛和夫 著

京セラファイロソフィ

横川中(始伊) 寺 田 洋二郎

「動機善なりや私心なかりしか」稲盛和夫氏の著書『京セラファイロソフィ』の一節である。自分に迷いが生じたとき、自問自答を繰り返すとき、反芻する言葉の一つだ。

先日、京セラ名誉会長の稲盛和夫氏がご逝去された。優れたリーダーであり郷土が輩出した偉人であることは言うまでもない。この原稿を書くことが決まった当初、どの本を紹介しよう

か悩んでいたのだが、氏の訃報に接したその日に、原稿依頼の封書が届いたことに何かしらの縁を感じ、迷うことなくこの本を紹介することに決めた。本書は、県教委主催の研修会等でも紹介されたことがあるためご存じの方も多いただろう。私自身も教頭時代に読んだことがあり、自分が校長という立場になり、再読して改めて自分の手元に置いておくべき一冊だと感じている。

校長という立場は、何かにつけて決断しなければならぬことの連続である。コロナ禍の今はそれに拍車がかかり、これまでに経験したことのない決断を迫られる場面も少なくない。私は、そういうときに稲盛氏が信条としていた言葉の数々を、自分が決断するときの指針とするよう心がけている。

「利他の心」「小善は大悪に似たり大善は非情に似たり」これらの言葉は、経営哲学というよりもむしろ人としての在り方や生き方にも通じる言葉であるように思う。校長にとって不可欠な学校経営力の根幹となるものは、自分の人格を磨き続けることであると本書は教えている。また、人格を磨くための手段として、日々の生活の中で「六つの精進」（努力・謙虚・反省・感謝・善行・感性）を実践することの重要性も

説いている。校長自らが人格を磨くために日々精進し続けながら熱く燃えることで、学校に大きな渦をつくるのが可能となる。そして、校長がその渦の中心となって動いてこそ、生徒や職員は充実感をもって日々の学校生活を送れるのだろう。

サンマーク出版 二六四〇円

■喜多川 泰 著

「秘密結社とLadybirdと

僕の6日間」

樋脇中(北)川 池 省 三

息子に勧められて出会った書籍です。タイトルから中高生の何か秘密の出来事を想像して見ました。内容はそんな単純なものではなく、一人の高校生を主人公として、これから大人になっていこうとする主人公が、自分の人生をどう生きていくかを壮大なテーマとしています。

私は、いつの間にか自分の生き方と比較しながら本の中に引き込まれていました。この本を

手に取ったいろいろな年代の人たちが自分の生き方を考えたり、見直す機会になったりするのではないかと思います。

子どもの頃、自分たちの秘密基地をつくって遊んだことを思い出すと同時に、今の会社や学校としての在り方を改めて考えさせられ、魅力ある集団やリーダーの在り方などにも気付かされました。

現代の私たちの職場では、業務改善による働き方改革を進めることを求められています。仕事だからとかメ切を守るために仕事をやっていると、期限を守ることが目的になり、時間は短縮されたとしても、ワクワクするような時間を過ごすことはできない。本作品を通して、自分がやることを少しでも相手がビックリするような工夫をしようと思えることで、楽しい充実した人生を過ごすことができる。子どもの頃に、ドキドキしながら、未来の自分を思い描いていたことを思い出させて勇気をもてる作品です。

私は、喜多川さんの著書の「手紙屋」や「運転者」を図書室にもおいてもらっています。多くの子どもたちに読んでもらって、自分の人生を豊かなものにしてほしいと願っています。

サンマーク出版 一四〇〇円

今回原稿を依頼され、はたと困ってしまった。趣味といえるものはない。ましてや「文芸」などはほとんど無縁である。強いて言えば、映画を観るのは好きだ。いや観るのは苦痛ではないと言った方が適切かもしれない。ジャンルは問わない。気の向くままに観る。で、よく映画を話のネタにする。

アカデミー賞映画の「グリーンブック」は、アフリカ系の天才的なピアノストとイタリア系の運転手兼用心棒という全く個性の異なる二人のキャラクターが、人種差別が強く残るアメリカ南部での演奏旅行を通して共通点を見つけていく話だ。イタリア系の運転手が、黒人に偏見を持ちながら旅を続ける中で、あることをきっかけに、黒人に対して抱いていたイメージが変化し、互いに成長していく。誰だって先入観は持つってしまうもの

◆◆◆ 趣味・文芸 ◆◆◆

「映画をネタに語れること」

鹿屋農業高 馬場 昭 浩

だが、しばらく一緒にいると相手にはいろんな面があるんだということに気がつく。映画の二人も最初は先入観を持っていたが、時間が経つにつれて、相手がどんな人物なのかをちゃんと見て、お互いに「この人は、本当はいい人だよな」と思った時に友情が生まれる。だから、お互いに話すことも大事だが、

相手の立場に立ってみる「ことが自然にできるようになることは大切なことである。」

「インディペンデンス・デイ」では、新型コロナウイルスとの戦いについて考えた。新型コロナウイルスは、国籍や性別に関わりなく、人類すべてに襲い掛かった共通の敵といえる。この映画では人類の敵として現れた宇宙人に対し全

人類が一致団結して立ち向かったが、現実、コロナ禍という共通の敵を前にしても、非難し合う国があったり、影響力拡大に利用しようとする国があったりと、人類が一致団結することの難しさを再確認した。しかし、一方でこのよ

か。新型コロナウイルスの恐ろしさは、まさに宇宙人が地球侵略にやってきたようなもので、ではどうやってこれに立ち向かうか。それは簡単なことではないが、一言で言うと、メリハリをつけながら、その時々で「いま求められる人間らしさは何か」ということを思考することではないか。ワクチンや抗ウイルス剤は、人間の持つ免疫力を促し、補助する役割なので、結局は、自分でコロナウイルスに打ち勝つか、コロナウイルスと仲良くするしか道はないわけなので、「ウィズコロナ」、「ニューノーマル」というような新型コロナウイルスの流行によって社会にもたらされた変化を人間らしさで乗り切る

ことではないかと思う。

話変わって、山岳救助隊をテーマとした映画「岳」の中で、「山を登れば楽しいことがある。しかし、山には悲しいこと、苦しいこともある。それらを全て含めて山だ。どちらを多くするかは自分次第だ。」という台詞がある。学校は楽しいところでないといけないが、楽しいだけのところでないのも事実だ。悩むこと、うまく事が進まなく悲しくなること、きついこともあるだろう。それらを含めて全てが学校なのだ。どちらを多くするかは自分自身である。

最後に、黒澤映画「生きる」を観て、志村喬演じる市民課長のように、「今までに自分はどれほど生徒たちのために尽くしたか」、定年を前にしてそれが非常に気になった。

制の枠組みが提案されているようで、これは、コロナ騒動によってもたらされたプラスの面か



地域と共に子供を支える

学校づくり目指して

牛尾小(始伊) 田上 卓

今年四月、「伊佐市の花 さくら」が咲きほこる中、伊佐市立牛尾小学校に着任しました。学級数五学級(特別支援学級二)、児童数二十六名、PTA戸数十八戸の極小規模校です。本校は、明治十五年十月に「木之氏小学校」として設立され、今年は創立百四十周年という節目の年に当たります。また、校歌は、大口出身の作家海音寺潮五郎氏が作詞を手掛けられ、昭和三十九年の創立八十周年記念事業として制定され、子供たちに歌い継がれています。

校区は、川内川の支流牛尾川が流れ、高熊山を望み、田園地帯が広がる自然豊かな地域です。歴史的な場所として、西南の役の戦場となった高熊山やかつて新納忠元公が治めていた木ノ氏地域、国指定の重要文化財郡山八幡神社、牛尾金山跡地(現在、大口電子管理)等があります。このような、伝統と歴史のある校区で学校経営をするにあたり、「伊佐のふるさと教育」の推進を基盤として「地域と共に児童を支える学校づくり」を目指して教育活動を展開すること

にしました。一つ一つの活動を大切に実施し、地域を知り、人と語らいながら連携を深め、地域と信頼関係が構築できるように進めています。

伊佐市の小中学校は、地域の力強い支援を受けながら子供たちの健全育成に努めています。そこで、本校と牛尾校区コミュニティ協議会の方々と連携した取組について御紹介します。

「子供の安全」という観点から「青パト隊・子供見守り隊」の活動です。平成二十六年二月に起きた下校時の声かけ事案をきっかけに、その前年に校区内四高齢者クラブの協力で結成された「牛尾っ子見守り隊」が発展する形で活動が本格的に始まりました。校区内を五班に分けて集合場所・集合時間を決め、隊員二・四名と共に集団登校しています。また、毎週水曜日は、青パト隊が出動し通学路を車で巡回して不審者対応等をしてくださっています。この活動が始まった当初は週一回、安全を第一の目的に掲げ、歩いて登校し体を鍛え、地域の四季に触れ、地域の方々と交流を深めながら登校する日として、毎週水曜日を「山坂達者の日」として位置付けてありました。現在は毎日、地域の方と楽しく語り合いながら元気に登校しています。

子供たちの健全育成を目的とした活動として、青少年体験活動があります。年間計画に沿



って月一回、事務局を中心に地域の方々の協力を得ながら、「田植え・稲刈り・脱穀体験」、「どろリンピック・川遊び」、学校の石段やる気坂を使った「ソーメン流し」、また、鹿児島大学の学生とコラボした「高熊山清掃活動」等、特色ある活動がなされ子供たちにも好評です。計画・募集・準備・指導・後片付けまで地域の方々主体で進められ、「地域で子供たちを育てる」という強い意識を感じる活動となっています。郷土の伝統芸能の継承を目的とした活動として、「棒踊り」を学ぶ活動があります。平成二十年から始まり、当時は牛尾地区由来の「牛尾棒踊り」と郡山地区由来の「郡山棒踊り」の二つを隔年で学んでいました。近年は、「牛尾棒踊り」を練習し、公演会等で披露しています。棒踊り保存会の会員も高齢化が進む中、子供たちのためにと熱心に指導してくださっています。

このような活動が認められ、令和二年度「地域学校活動文部科学大臣賞」を受賞しました。学校にとつて最大の理解者・協力者である地域の方々に心より感謝しています。今後も地域と手を取り合い、子供たちにいただいた温かい支援に対して、次代を担う子供たちの活躍する元気な姿でお返ししたいと思います。そして、固い絆のもと、地域と共にその歩みを進めていきます。



張りとの緩みのバランスが新しい発想を生む。

張り詰めた状態から解かれて和んだときや笑っているときにアイデアが生まれる。



願柱から開聞岳を望む

© K.P.V.B

提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

本年度の県校長会館主催の教育講演会が左記のとおり開催されます。御来場をお待ちしております。(事前連絡が必要)

- 日時 令和四年十二月十一日(日)十四時～
- 会場 県医師会館大ホール4F
- 講師 高橋聡美氏

〔中央大学人文科学研究客員研究員〕
○テーマ 「惨事報道から心を守るには
～ 昨今の報道の事例から～

教育長異動

○再任 令和四年十一月二十日付

薩摩川内市 藤 田 芳 昭 氏

季節の言葉 「霜月」

しもつき

霜月や 雲もかからぬ 昼の富士

正岡子規

霜が降りる頃になった月との意。

秋も深まり、早いところでは朝霜が降りる時期になったことを表しているといわれています。穀物の収穫を感謝する行事(祭り)が各地で行われる月でもあります。

編集

後記



私事、昨年度は、奄美群島連合校長協会の広報部長を務め、『奄美の教育』の発刊に携わりました。コロナ禍で他の専門部活動が中止等となる中、唯一広報部だけは、影響を受けることがなかったため、年度末の会の中で、「おかげさまで広報部だけは、仕事を全うすることができました」と、多少皮肉を込めて活動報告をしました。これがいけなかったのでしょうか、本年度の異動発表直後、県連合校長協会の広報常任部員の打診をいただき、逡巡しながらも受諾し、今日に至っています。『奄美の教育』に寄せられる内容としては、やはりコロナ禍における工夫改善した学校運営の取組等についての執筆が多く、原稿の行間に、学校の先頭に立って舵取りをする校長先生方の雄姿を垣間見ることができました。校正作業を進めながら大いに勇気付けられました。

本年度はまた、県内各地の校長先生方の獅子奮迅の活躍に、原稿の段階から触れることができ、昨年度以上に大きな元気をもらっています。三月に部員への誘いを断らなくて良かったと痛感しています。本稿を手取ることで、県内の校長先生方との強い繋がりを感ずるのは、私だけではないはずです。

今回も御多用な中、玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様方に、厚く感謝申し上げます。校長先生方には、ぜひ御一読いただき、学校経営等の参考とさせていただきますようお願いいたします。

西谷山小学校 吉峯 進